

2 石製行火について

行火とは手足を暖めるための可搬式の暖房具である。中世から近世前期にかけての石製行火の出土土地をみると、富山、石川、福井の北陸三県で22遺跡が知られる。これに土製の行火も加えて全国の出土土地をみると31遺跡数えられる。

行火については、出現時期や形態の変遷、さらには石材産地との関係が論じられている。¹³筆者も分布や製作の背景について若干言及した。¹⁴ここでは紙幅の関係から分布の概説にとどめるので詳細は既往の研究に依拠されたい。

行火の形態に触れておこう。初源的な形態としては、天井があつて横口をもつものが認識されており、14世紀後半の年代が与えられている。¹⁵その後次第に改良がなされて、本遺跡にみるような有蓋・横窓のものが出現し、平面形も方形からD字形や橢円形へと変化している。

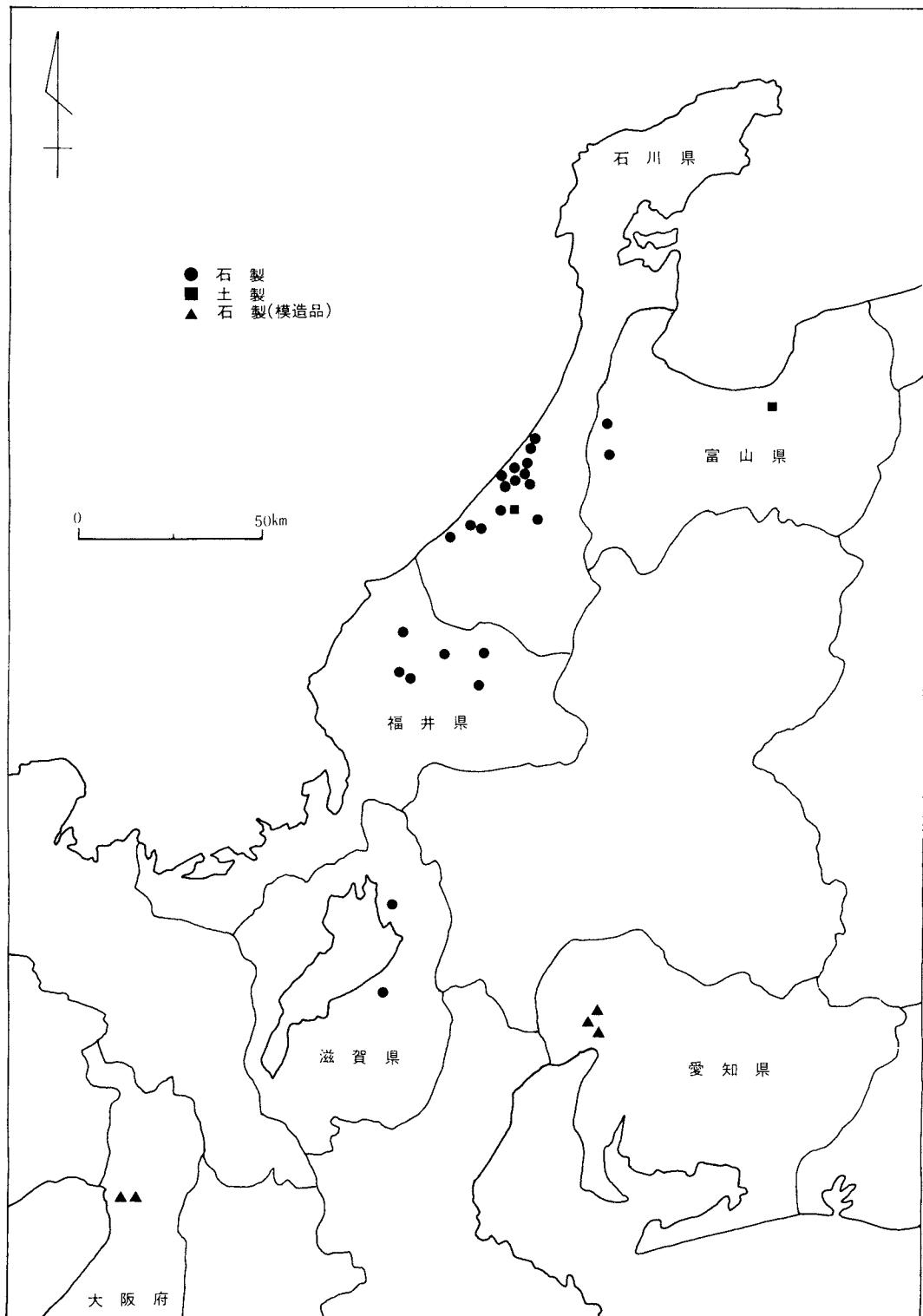
第24図に石製、土製の行火分布図を示した。富山県では石製2遺跡、土製1遺跡、石川県では石製14遺跡、¹⁶土製1遺跡、¹⁷福井県では石製6遺跡、滋賀県では石製2遺跡が知られる。さらに、愛知県で石製3遺跡、大阪府で石製2遺跡が知られるが、これらは実用品とはみなしがたいものである。

富山県の石製2例は石川県寄りに分布する。石川県では、手取川扇状地に最も多く、梯川流域にも散見される。現在のところ旧加賀国内にのみみられる。形態は、横口のものも有蓋・横窓のものも見られるが、平面橢円形のものは石製では見られない。福井県では6遺跡あげられるが、朝倉氏遺跡が出土数において他を圧倒している。¹⁸他の出土土地も同遺跡との関係においてとらえられる。戦国大名朝倉氏と職人の関係を知るうえで注目すべき分布を示している。なお、旧若狭国には見られない。滋賀県のうち1例は小谷城跡出土で、ここは朝倉氏と同盟関係にあった浅井氏の居城である。

愛知県、大阪府の例はいずれも小型の模造品（ミニチュア）で、平面が橢円形で、長径6～7cmである。蓋には透かしや草花の刻文がみられ、装飾性が付与されている。

各地域における行火の時期をみると、14・15世紀には北陸三県内で展開しており、16世紀の後半になって滋賀県に現れる。愛知県、大阪府の例は16世紀末～17世紀にかかる近世の所産として理解される。また、これらは模造品であるから、実用としての行火使用地域ではない。したがって実用品としての行火は9割以上が北陸に分布することになり、中世～近世前期において確認される石製行火はきわめて北陸的な遺物として認識される。

石製品研究の現状をみると、行火をはじめ、臼や鉢、そして硯や砥石など生活のなかで重要な役割を果たしていたと思われるものでも、属性分析すらなされていないものがある。多くの出土資料を、技術史や生活史のなかで適切に評価することが今後の課題である。



第24図 石製・土製行火分布図(中世～近世初頭)